学生の自律的学習動機の変容

山田智之
(町田市立鶴川第二中学校)
自律的学習動機

Changes in Autonomous academic motivation of students
TOMOYUKI YAMADA
(TSURUKAWA DAINI Junior high school)
Autonomous academic motivation

問題と目的

文部科学省 (2011) は、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」において、自分の将来との関係で学校での学習に意義が見いだせずに学習意欲が低下し、学習習慣が確立できない子どもの状況を指摘し、キャリア教育の一層の充実を求めている。

そこで、本研究では中学生・高校生・大学生を対象に自律的学習動機の変容を明らかにし、その影響要因について検討する。

方法

調査は、全国の学生を対象にしたインターネットによる WEB 調査を実施し、516 名 (中学生: 209 名, 高校生: 107 名, 大学生: 200 名) の学生を分析対象とした。学生の性別は、男子学生: 264 名、女子学生: 252 名であった。調査票の項目には、自律的学習動機 (西村・河村・櫻井, 2011) と、独自に作成した自己の未来イメージ尺度を用いた。自己の未来イメージ尺度は、社会人 (職業人) になったときの表情を、Ekman and Friesen (1975 工藤訳 1987) が明らかにした 6 つの情動に対する表情 (喜び、悲しみ、驚き、怒り、嫌悪、恐れ) に「真剣」「無表情」「その他」の 3 つを加えた 9 項目の中から選択させ、選んだ表情に理想・現実・当為の 3 つの自己概念の中から一つをあてはめさせるものである。

結果

一元分散分析を行ったところ、内的調整において主効果 ($F(2,513)=14.873, p<.001$) が有意であり、Bonferroni による多重比較 ($p<.05$) の結果、中～大学生、高～大学生の間において有意であった。また、外的調整において主効果が有意であり ($F(2,513)=55.213, p<.001$)、Bonferroni による多重比較 ($p<.05$) の結果、中～高校生、中～大学生の間において有意であった。

Fig.1 自律的学習動機の学校段階による相違

次に表情と自己概念の関係を探索的に検証するために、ダミー変数を用いて距離尺度 χ^2 による相関分析を行った。その結果、1次元と2次元において行と列の関係が十分に強く、表情による自己概念に相違 ($\chi^2=153.411, df=16, p<.001$) が認められた。各項目は、大きく3つのグループ (ポジティブ理想、ポジティブ当為、ネガティブ) に分類することができ、これを未来イメージとした。

Fig. 2 表情 (行) と自己概念 (の列) の同時布置図

次に、相関分析の結果得られた未来イメージを独立変数 (ダミー変数)、自律的学習動機を従属変数とする強制投入法による重回帰分析を行った (Table 1)。

Table 1 自分の未来イメージが自律的学習動機に与える影響

従属変数	内発的調整		同一化的調整		取り入れ的調整		外発的調整	
	F	p	F	p	F	p	F	p
分散分析	6.735 **		16.701 ***		.037 n.s.		3.287 *	
R ²	.022		.057		-.004		.009	
標準偏回帰係数								
	β	p	β	p	β	p	β	p
ポジティブ理想	.187 **		.259 ***		.015 n.s.		-.139 *	
ポジティブ当為	.160 **		.282 ***		.007 n.s.		-.086 n.s.	
ネガティブ	--		--		--		--	

考察

本研究の結果、学校段階があがるにつれて、学生は学習動機における自律的傾向を高め、他律的傾向を低下させることが明らかになった。また、未来イメージがポジティブであることは、学習動機において自律的傾向が高まることが明らかになり、キャリア教育の重要性が示唆された。